



探偵は俺と  
エッチ  
しないと  
推理ができない

会社の汚職事件に巻きこまれて、責任と罪を背負わされ切りすてられた俺は、社会に絶望してホームレスに。

冬の骨まで凍えるような日、公園の藪のなかで、死にかけのように寝ていたら「あれ？花山じゃないか？」と声をかけられて。

高校の同級生で、名はたしか住原。

俺の惨めな境遇について、とくに聞いてくることなく「いやあ、ちやうどよかった」とある話を持ちかけた。

「今、急募で助手を探しているところだつたんだよ。」

事務所で住みこみしていいから、花山、暇そうだし、やってくんない？」

「暇そうだし」の一言で片づけられたのが、かえってせいせいして首肯。

事務所にいき、シャワーを浴びて落ちついてから知ったことには、住原は探偵業をしていると。

しかも主にラブホで起こる事故や事件を扱っているらしい。

ラブホでは日々、なにかしらのトラブルが発生。

個人的なものならともかく、裏社会の人間がいり乱れての諍いや陰謀もあるから、対処が一筋縄でいかない。

そこで、警察に連絡していいのか否か、判断材料にするため。

知らせるにしろ、警察に介入されてはメンドウなことを、先に処理したいがために、探偵こと住原に事故事件の全容を調べて解明してもらうのだとか。

そして、助手たる俺の仕事は、事務所の管理と、電話番号や書類整理などの事務仕事に加えて、ラブホに同行して住原の手伝いをするというもの。

住原に拾われてから一週間、ブナンに事務所内での仕事はこなしていたものの、とうとうラブホからの依頼が。

はじめて探偵助手として出向き、扱うのは、いきなりの人死の事件か事故。

オーナー曰く、部屋のバスタブで、泡まみれに女の人が倒れていたとのこと。

額がへこむほどに、頭を強打して死んだらしく、相手の男は逃亡済み。ホテルの監視カメラの設置数はすくなく、不明慮な映像では、男が正体不明とあって、個人のトラブルか組織の揉めごとの一端か、判断しきれず、住原に助けを求めたとのこと。

といった依頼内容を聞きながら、ホテルについてきて、生まれて初めて葬式以外で死体を見るのに、緊張していたのが。

部屋のまえに着くと「だいじょーぶ現場検証は俺だけがするから」と俺は廊下に置きざり。

そりゃあ、見ないでいいなら、それに越したことはないが「だったら、

なんの助手だ」とどこか釈然とせず。

所在なく待つこと三十分、ドアを開いて顔をだしたものの、調査結果を口にしないで「きて」と顎をしゃくり、隣の部屋へ。

壁に穴でも開いていたのか？と思いきや、早早、服を脱ぎだし「今から再現するから」と。

探偵ならではに、状況や証拠を見て推理するだけでなく、当事者の真似をして、実験的に検証するらしい。

「いや、そんなの聞いていないぞ」と眉をしかめたものの「なあんな！」とからかうことなく「花山は女役な」と大真面目な顔をして催促。

断ったら、事務所を追いだされるのかな？

一週間、事務所に住んで、すっかり居心地のよさを覚えたからに、極寒に震えるホームレス生活にあともどりするのは、気がすすまない。

「まあ、男同士だし、あくまで検証なのだから、フリだけだろう」と従うことに。

全裸になって、白い煙がもうもうと立ちこめるユニットバスへと。

バスタブの栓を開けつつ、シャワーをだしっぱなしにしているのは、当時の現場の状況と同じにしてのことだろう。

カーテンを開けたまま、ついでにシャワーを浴びている住原は「これ、体の前面に塗って」とボディソープを差しだした。

曰く「体同士こすり合わせながら洗うやつで、死んだ彼女に使った形

跡があつたから」とのこと。

「え、なに、俺がこれを塗りつけた体で、おまえの背中を流すのか」を頬を引きつらせるも「そうだよ」と下心も他意もなさそうに、いけしやあしやあと。

「じやなきや、検証する意味ないじゃん」と非協力的なのを訝しむほどで、真摯に調査をする態度がぶれないのに対し、俺だけが顔を赤くしたり青くしたり、アホらしくなってくる。

本気も本気で真相を解明するつもりがあるのか？

迷探偵ぶりが、ここまでフザケていると「どうやって仕事をして決着をつけるのか」とむしろ興味がひかれて、バニラの香りがするボディ



ソープを胸から腹にかけて塗りこむ。

指示をしてからは、シャワーを浴びて見向きもしない住原に、舌打ちしつつ、バスタブへと踏みこんだ。

もしやもしや頭を洗っているのを、開いたわきの下から腕をいれて抱きしめ、背中に胸と腹を密着させ、ぬるぬる開始。

なるほどエッチ用品とあって、ふつうのボディソープより粘着質で、頭がくらむような匂いがし、いかがわしい響きの水音が立つ。

男同士のごつごつした体の摩擦がやわらいで、ほどよい滑りと刺激が。

「は、ん、く……」と早くも息が切れてきたのは、シャワーの蒸気の熱さや、ボディソープのアヤシイ成分のせいだけではない。

会社に入社してから三年間、ずっとゴブサタだったものだから、久しぶりに人肌と触れあって、ついつい気が高ぶってしまい。

相手が住原だろうと、抱きしめるのがムサクルシイ男の体だろうと、いや、だからこそ、乳首が固い背中にぬりゆぬりゆ擦れるのが「はう、あ、あふ、ああ・・・」と具合がよろしい。

「飄々としやがって、鼻を明かしてやる」とはじめは意気こんだのが、唇を噛みつつも、ぬっちやあ、ぬっちやあ、ぬっちやあ背中を洗うのに没頭。

住原が身じろぎして「うーん、やっぱ、この体勢じゃあムリだなあ」と呟いたのに、我に返ったところで、勃起を自覚。

「住原を困らせるどころか、俺一人盛りあがってどーするよ！」と焦

るやら、恥ずかしいやら。

ばれる前にひっこめようとする暇はなく「じゃあ、コンドはまえで」と住原がふりかえり、向きあうことに。

頬を火照らせて、股間を隠そうとし「いや、湯気で見えないか」ととどまる。

タシカメるため、まず住原のに目をやれば、白いもや越しに、そそり立った男根のシルエツトが透けて見えて。

「おおおおおい！探偵さんよお！なんで、やる気満々になってんだよ  
おおお！」

自分のことを棚にあげて、悲鳴をあげてツッコむも「だから、再現するつってんだろ」とウツトウシそうに返され「ほれ、早く」と抱きよ

せられる。

再現といったって、まさか本番までなだれこむつもりか！？

こいつ、ホテルで調査するたびに、本格的再現エッチしてんの！？男相手でも！？

「イカレテいる！」と突き放したかったものを、ボディソープでつるして、ままならず。

そもそも、勃起がばれたくなくて、腰を引いて、不安定な体勢になっているから、力がこめられないし。

いやいや、相手が最後までするつもりだろうと、ラブホで住原とちんこをくつつけて抜くなんて、御免だつつうの！

そう心の叫びをあげながらも、ボディソープのせいでバスタブの床は滑りやすく、ころばないよう踏んばるのに精いっぱい、怒り全開にクレームする余裕はなく。

「ともだチンコをするよりはマシだ」としかたなく、住原に抱きついて胸を合わせ、でも、背中のように、せつせと洗おうとせず。

焚きつけて、ホンロウしようなんて、ムキに張りあうのはやめやめ。全身全霊で非協力的な姿勢を示し「こいつ、つかえないな」と呆れさせアキラメさせる作戦にシフト。

早くも効果てきめんか、住原はため息をついたものの、直後には「ひああっ・・・！」と悲鳴をあげさせられて。

首から背中に指を滑らせ、そのまま尻の奥にもぐりこませやがったのだ。

ボディソープのぬるぬるを指にまとわせて、ちゅつくううと体内に入。

エッチ用品だから、ローション代わりになるのか。  
それにしても、尻をいじる趣味のない俺にして、初体験がまるで抵抗感も不快感もなく。

ちゅくちゅくかき回され、ちゅばちゅば広げられるのに「や、やあ、やあん、あひい・・・」と腰をくねらせ、住原に抱きついたまま、ぬぶぬぶ胸をすり寄せて。

「ほら、息をするの忘れるなあ。のぼせてぶっ倒れるぞお。

だいじようぶ、だいじょーぶ、これまで仕事で、何人もの男も女も指でイカせてやっているから」

「何人もの！？」「男も！？」「イカせる！？」と頭はパニック祭りになるも、住原の探偵（？）テクニクに、体はウレシガルばかり。

腫れた乳首を、あんあんすりすりするのが、もろバレて、恥ずかしいような、でも、住原の乳首も立ってるのが分かって、はあはあ涎が垂れるような。

遠ざける、ちんこは放っておかれて、先走りがだだ漏れとはいえ、さすがにノータッチで射精はムリだろう。と、思っていたのが。



「やはあん！しょこお・・・！」と背中に爪を立てたところで、弱点を二本指でずつちやずつちやずつちや！猛攻。

「あ、だめ、だめえ、だめってえ、住、原あ、おれ、ああ、俺え、お尻で、いくの、ひい、あ、あん、あん、あふ、や、やあ、やだあ！探偵、なら、推理し、ろお、やん、んあ、あ、ば、かあ・・・！」

どうせならと喘ぐついでに罵ってやれば、癪に障ったのか、指が抜かれて。

ほっと一息つくも「抱きあったままじゃ、倒れないな」とぶつぶつ口にしながら、力強く俺を引きはがし、ターン。

勢いあまって、倒れそうになったのを、慌ててタオルかけの棒をつかむ。

棒をにぎりしめて上半身を屈め、後方に尻を突きだす「この格好は・・・！」と戦慄した直後、腰をつかまれ、住原の息子を迎え入れることに。

「は、ば、かあ、俺、未、経験で、はいる、わけ・・・！」と呻いて、体を力ませたが、これまた探偵テクニックにして百戦錬磨なのか、ぬぷりぬぷりとカクジツに潜入。

弱点をかすめて「あひい、あああ！」と体の力が抜けた隙をつき、重量感のある高速ピストン始動！

「あ、はあ、あ、や、やあ、こ、こん、なの、ただ、の、レ、プ、これ、こそ、犯、罪だあ！な、なにが、探偵だ！調査、に、かこつ、けて、エッチ、した、だけ、あ、だめ、おつき、しないで、ごめ、いい、

すぎた！謝、から、からあ、ひゃあん、そん、な、早く、だめ、だめ、らめ、らめえ、ふひい、ひゃん、ふうああああー！」

ちんこ未接触で、はじめて男に尻を掘られて。

会社にはいつてから枯れたジイサンのようだったのが、精通を覚えたてで加減できないようにぶっ放すとは・・・。

ホームレスになったときは地に落ちたものだと思ったのが、まだ、どん底があつたらしい。

探偵の検証と称したレイプで、始終あんあんヨガってしまったのに、反吐がでるような自己嫌悪。

「もう恥もプライドもなく、マジ、警察に訴えようかな」とぐすぐす泣いていたら、まだまだ元気満点のを、ヨウシヤなく突きつけられた。

「おま、けいさ・・・！」と皆まで云わせてくれず、再突入。  
ただ、今回はレッツパーリー！とばかり、ずこぼこしてこないで、体内でゆらゆらと。

なんだ？ちんこで調査する、ふざけたお下劣探偵にして、スタミナ不足か？

と期待しかけ「ふああ！え、あ、あ、あ、あひい！」とイッタばかりの体に鞭打つような快感が。  
どうやら、弱点をターゲットに、固い先っぽでちゅくちゅくちゅくちゅく！突きまくっているらしく。

「あ、あふう、は、は、はあ、はあん、ば、かあ・・・イッタ、ばつか、って、気もち、よすぎて、ツラ・・・く、この、むつつり、助

平、探偵、んあ、あ、あ、ああ、たま、ってん、なら、風俗、いけ、うひい！ひにや、ああん！はひあん！あ、あふ、ご、ごめ、怒った？う、そ、もっと、固、あうん！あ、そん、ごり、ごり、だめ、ごめ、ごめ、ん、ってえ！」

思春期か！と自分でツツコみつつ、頬を赤らめなくなるような、大量の二回目の射精。

高校のころ、俺、住原のことイジメたっけか？

その腹いせでは？と疑うほどに、死にたいレベルの屈辱的なシウチ。

復讐される覚えがないか、本気で考えたものの「うーん、これでも頭を強打する状況にならないかあ」と住原は唸って頭をひねっているよう。

「ええ！？まさか、まだクソ真面目に検証をつづけているの？」とにわかには信じられず、呆氣にとられるうちに「ああ！そうか！」と再三、生きのいい住原の息子がレツツラゴー。

ぼぐれたそこに、ぬるうりと侵入し、弱点に至りそうになって間際でストップ。

「はう！ど、して・・・！」と涙目で背後を見やるも、煙に霞む住原は、胸を上下させはふはふしつつ、無表情。

くっそ！レイプまがいにもみくちやに犯しておいて、極端に放置プレイかよ！  
ほんとうにリベンジポルノじゃないのか！？

思いのたけを、ぶちまけたいものを、すこしでも腰を振れば、弱点に

こすれそうで、歯を食いしばり、ぐっと太ももに力をこめる。

といって、ちんこをびんびんマックスにしながら、悟ったように遠い目をする住原を待ちわびても埒がないし、オネダリなんてもつてのほか。

すこしずつ、すこしずつ、揺さぶって、こちらに注意を引かないと……。そのまま、できたら射精させて、終わらせたいところ。

生唾を飲みこみ、おそろおそろ腰をうしろへと。

が、ゆっくりだろうと、掠めただけで、体内で破裂するように快感が広がり「はひゃあうん！」とみつともなく喘いでしまい。

理性がとんだらもう、肉欲に溺れるまま、あんあん腰をうしろに突き

だし、住原の息子にしゃぶりついて、ちゅぷう！ぬっちゃあ！くぷくぷくぷく！と。

「あ、やだ、腰、とまん、な、住原、の、イジ、ワ、俺を、こな、辱め、あん、あん、あん、ひやうん、あふうん！あ、あひ、お、俺、昔、ひど、こと、した？あ、あ、あ、ああ、ああ、あああ！だ、ったら、ごめ、ごめん、する、から、住原、も、がまん、できな、ちん、ちんで、もつと、俺、ん中、掘り掘り、してえ！」

住原の息子ににゅぷにゅぷしゃぶしゃぶするのに夢中になるあまり、心拍数と熱が急上昇、シャワーの熱気に追いうちをかけられ、ひどい眩まいが。

つるりと片足をうしろに滑らせてしまい、尻をふるのに集中していた



から、とつさに体に力をいれられず、勢いよく上半身を前のめりに。目のまえに迫る、タオルかけの金属の棒。

その瞬間、死んだ女の人の額がへこんでいたのを思いだし、ぞつとしたのが、頭を打ちつけそうになったところで、間一髪「おーっと」と住原が胸を抱えてとどめてくれた。

おかげで、ラブホで発見された第二の死体にならずに済んで・・・。

ラブホのオーナーに「フコウな事故だったのだろう」と調査結果を伝え、タオルかけの設置場所を変えるアドバイスをして、ブジ報酬をもらい、今は食べ放題の焼き肉店。

「食べ物でゴマカされも、釣られもしないからな！」とふんぷんしながら、がつがつ食べて、結局、久しぶりの肉摂取と「仕事オワリの一

杯サイコー！」とアルコール摂取に、生きるシアワセを噛みしめてしまい。

まんまと絆された俺を、にこにこ眺めながら「知ってる？日本で年間、風呂場で亡くなる人は二万人近くいるんだよ」とウンチクをたれる住原。

死にたがって、でも、死にきれず、さ迷った末、見つけた、思いのほかに居心地のいい宿り木から、果たして、羽ばたけることができるのだろうか・・・。



